

平成28年度活動報告書(1/4)

学部・委員会名	農学部
学部長・委員長等氏名	小川 博
担当所管	農学科
テーマ	ディプロマ・ポリシーを実現するための取り組み

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
学部・学科改組後の平成30年度以降の新体制への移行を見据えながら、ディプロマ・ポリシーを実現するための方策について検討する。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
ディプロマ・ポリシーを確実に実現する研究室体制等に関して、学科内にワーキンググループを立ち上げて検討会を開催し、定期的に学科会議に諮りながら、議論を重ねる。とくにカリキュラムの再編成に向けて議論を進める。
3. 達成度を判断するための指標
カリキュラムについては、授業評価アンケートなどをもとに解析を行う。
4. 成果・評価
<p>■成果</p> <p>農学部改組に伴い、ディプロマ・ポリシーの実現に向けて、研究室の再編を行った。カリキュラムに関しては、カリキュラム委員会、農学リテラシー委員会での検討案を、随時学科会議に諮り最終案としてまとめた。特に卒業生アンケート結果に基づき、農業実習の強化を図った。</p> <p>■評価（5～1で記載してください）</p> <p>4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた</p>
5. 課題及び改善事項
特になし
6. 平成29年度への継続の有無
無

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成28年度活動報告書(2/4)

学部・委員会名	農学部
学部長・委員長等氏名	小川 博
担当所管	農学科
テーマ	高校との連携強化と学生の確保

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
模擬講義や学科説明会などへの積極的な対応により、優秀な学生確保に努める。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
申し込みがあった段階で直ちに派遣教員を決定する。キャンパス見学会における研究室主催のマナビ体験の検討、模擬講義およびキャンパス見学ツアーに学科として積極的に参画する。個人申し込みによる研究室見学、進学相談についても積極的に対応する。
3. 達成度を判断するための指標
出張講義の実施実績、キャンパス見学会時のマナビ体験、模擬講義の実績をもって達成度を判断したい。また、来年度の受験者数、入学者数についても達成度を判断するための指標とする。
4. 成果・評価
<p>■成果</p> <p>出張講義は昨年度よりも5件多い19件実施、オープンキャンパスのマナビ体験、模擬講義、およびキャンパス見学ツアーも例年通り実施した。また個人・団体見学33件、収穫祭等における進学相談も実施した。達成度の判断指標とした受験者数は減少したが、入試制度の改革があり単純比較は難しく、また世田谷キャンパスの新学科設置の影響を最小限にとどめた。</p> <p>■評価（5～1で記載してください）</p> <p>4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた</p>
5. 課題及び改善事項
受験生獲得に向けて、さらに出張講義等への取り組みを強化する。
6. 平成29年度への継続の有無
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成28年度活動報告書(3/4)

学部・委員会名	農学部
学部長・委員長等氏名	小川 博
担当所管	農学科
テーマ	農業教育への動機づけ

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
学生に対して、農業、農学を学ぶ動機付けを入学直後から実施する。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
農業に関連するビジュアル資料などを用いて、フレッシュマンセミナー、共通演習に組み込んで対応する。また、新入生だけでなく、2年生以上の学生についても、「農業ビジネスデザイン（一）、（二）」の履修を促す。
3. 達成度を判断するための指標
フレッシュマンセミナーや共通演習でレポートを提出させ、クラス担任による添削指導を通して学生とのコミュニケーション強化を図る。とりわけ、「農業ビジネスデザイン（一）、（二）」については、学外農業研修・実習実施後の実習日誌、引率教員による評価および学外農業研修・実習報告会（学内公開とする）におけるプレゼンテーション（報告書も含む）によって判断する。
4. 成果・評価
<p>■成果</p> <p>フレッシュマンセミナーでは、世界学生サミットと収穫祭文化学術展（農学科全研究室参加）の見学・レポートを課し、グローバルな視点を養うとともに、3年進級時に選択する研究室への興味を喚起させた。共通演習では、農業白書を中心とした文献講読とプレゼンテーション演習を行った。プレゼン前後に添削指導を行い、卒業論文作成への足掛かりとするとともに、1年生とのコミュニケーション強化を図った。農業ビジネスデザイン（一）、（二）については、学外農業研修・実習（3泊4日以上）を行い、実習中の実習日誌の完成度、学外農業研修・実習報告会でのプレゼンテーションおよび報告書の提出により評価した。履修した学生の達成度、満足度はきわめて高く、農業、農学を学ぶ動機付けとして有効であった。2年生以上の学生についても履修を促した結果、1年次にすでに履修した学生達のなかで、1年次に学外実習でお世話になった農家に再度実習をさせてもらう等、新たに実習先を見つけて実習に取り組んだ事例もあり、本テーマの目標はおおむね達成された。</p> <p>■評価（5～1で記載してください）</p> <p>4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた</p>
5. 課題及び改善事項
特になし
6. 平成29年度への継続の有無
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成28年度活動報告書 (4/4)

学部・委員会名	農学部
学部長・委員長等氏名	小川 博
担当所管	農学科
テーマ	教員と学生間のコミュニケーション強化

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
学生とのコミュニケーションを強化する。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
教員のオフィスアワー設定を必ず行う。フレッシュマンセミナー時にクラス懇談会を定期的 に開催するほか、悩みを抱えている学生に対しては、クラス担任をはじめ、学科長、主事が相談に のるなどの対策を講ずる。また、フレッシュマンセミナーや共通演習でレポートを提出させ、ク ラス担任による添削指導を通して学生とのコミュニケーション強化を図る。
3. 達成度を判断するための指標
クラス懇談会実施後には必ず学科会議にてクラス、学生の様子について報告を行い、記録を残 す。学生の講義、実験・実習の出欠状況一覧を作成する。フレッシュマンセミナーおよび共通演 習でレポートを提出させ、クラス担任による添削指導を行う。
4. 成果・評価
<p>■成果</p> <p>1年生に関しては、新入生オリエンテーションのほか、フレッシュマンセミナーで計2回のク ラス別懇談会を実施し、学科会議で欠席者等の情報を共有した。2年生に関しては、必修の農業 実習、生物学実験を利用してコミュニケーションを図った。3、4年生は各研究室で対応した。 教育懇談会、教育後援会地方懇談会に先立ち、講義等の出席状況一覧を作成し、保護者との情報 交換に役立てた。</p> <p>■評価（5～1で記載してください）</p> <p>4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた</p>
5. 課題及び改善事項
特になし
6. 平成29年度への継続の有無
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成28年度活動報告書(1/4)

学部・委員会名 農学部(畜産学科)
 学部長・委員長等氏名 学部長 小川 博
 担当所管 畜産学科 桑山岳人
 テーマ 教育課程編成の改善・ディプロマ・ポリシーを実現するための取り組み
 ※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

1. 目標(改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など)
畜産に関わる広い領域で貢献し得る人材の養成を目的とする本学科は、単位を取得し、社会人としての基本的な能力に加え、畜産・動物関連産業で役立つ知識と知恵を備えた学生に学位を授与する。このディプロマ・ポリシー実現のために従来の畜産学を軸に、そこから育った新領域を含めた動物に関する総合的な学問体系を網羅し得る教育課程編成の改革改善を実施する。また、この活動により学科志願者の確保と畜産学のより一層の発展を目指す。
2. 実施計画(具体的な方法・手段とスケジュールなど)
取得可能資格への対応を検討しつつ、以下の項目について段階的に改革を進める。 ・ 学科名称：“家畜の生産”にのみ特化したイメージから脱却する名称の検討 ・ 分野・研究室体制：各研究室がカバーする領域を、より明確に伝える体制および名称の検討 ・ カリキュラム：知識を実践で活かせる能力を体得させるための再編成を検討
3. 達成度を判断するための指標
1) 受験者数や併願先の動向状況 2) 学生自身が習得した知識を駆使し、考え行動してまとめ上げる「卒業論文」の作成過程、本人発表および提出の状況 3) 学科指定の求人数の動向状況
4. 成果・評価
■成果 1) 受験者数や併願先の動向状況：一般入試(全学部統一型)における競争率は、3.8倍であり、入試においては、求める人材を確保できたと考える。 2) 「卒業論文」の作成過程、本人発表および提出の状況：学生自身が習得した知識を駆使し、考え行動してまとめ上げ、研究室毎に卒論発表会を実施するとともに、学科として優秀論文発表会も実施した。 3) 学科指定の求人数の動向状況：前年より増加した ■評価(5~1で記載してください) 1): 2 2): 5 3): 4
5. 課題及び改善事項
平成30年度学部改組に伴い、これまでの学科からの継承事項と新設事項の調整が重要である。
6. 平成29年度への継続の有無
無

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成28年度活動報告書(2/4)

学部・委員会名	農学部(畜産学科)
学部長・委員長等氏名	学部長 小川 博
担当所管	畜産学科 桑山岳人
テーマ	地域への貢献

※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

1. 目標(改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など)
<p>畜産学科の持つ英知、技術および人材を駆使した地域連携と地域貢献を図る。</p> <p>対象として、本学科の所属キャンパスの立地する厚木市、神奈川県は元より、畜産の第一次産業領域を請け負う地方も含め、教育支援とともに畜産を通じた振興支援を実施し、地域の活性化を図る。これらの活動により畜産の継続的な発展・推進に貢献する。</p>
2. 実施計画(具体的な方法・手段とスケジュールなど)
<p>地域および地方の自治体、学校(小、中、高)あるいは企業などに対し、依頼を受けた事案への対応とともに、能動的な支援を行う。具体的な実施内容は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校などでの出前授業(模擬講義)への講師派遣・講習会、講演会への講師派遣・業務相談への対応・支援・委託研究への対応
3. 達成度を判断するための指標
<ul style="list-style-type: none"> ・高校などでの出前授業の実施状況・講習会・講演会の実施状況・業務相談の実施状況・委託研究の実施状況 <p>※)「守秘義務」が生じる事案については注意を要する</p>
4. 成果・評価
<p>■成果</p> <p>依頼のあった出前授業、講習会、講演会には全て対応した。また、業務相談にはその内容によって個人、研究室、学科として対応した。</p> <p>■評価(5~1で記載してください)</p> <p>4</p>
5. 課題及び改善事項
<p>これまで、個人、研究室、学科として対応が多かったが、来年度農学部は改組し現在の3学科体制から新たに4学科体制となる為、学部として各学科が連携して対応して行く事が重要である。</p>
6. 平成29年度への継続の有無
無

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成28年度活動報告書 (3/4)

学部・委員会名	農学部（畜産学科）
学部長・委員長等氏名	学部長 小川 博
担当所管	畜産学科 桑山岳人
テーマ	社会・産業への貢献

※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
本学科の持つ英知、技術および人材を用いた社会・産業貢献として、職業人の育成および研究成果の情報発信・実利用の推進を積極的に行う。また、市民向け教養講座などで畜産学の身近な話題などを提供する。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
<ul style="list-style-type: none"> ・実学を身につけた人材の育成と社会への還元（27年度就職率87.2%）と就職率の向上 ・研究成果情報の公表（27年度の学会誌論文42件、学会発表60件） ・共同・委託研究の受け入れ（27年度1件）は1件以上 ・市民向け教養講座への参画
3. 達成度を判断するための指標
<ol style="list-style-type: none"> 1) 卒業生の就職状況 2) 研究成果の発信・実利用の状況 3) 共同・委託研究の実施状況 3) 市民向け教養講座の実施状況
4. 成果・評価
<p>■成果</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 卒業生の就職状況：前年度より就職率は向上した（93.4%）。 2) 研究成果の発信・実利用の状況：国際誌を含む複数の雑誌に論文の掲載（35以上）、国際学会を含む複数の学会で発表した 3) 共同・委託研究の実施状況：複数の共同・委託研究を実施した 4) 市民向け教養講座の実施状況：厚木協働大学等に協力した <p>■評価（5～1で記載してください）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1)：4 2)：4 3)：3 4)：3
5. 課題及び改善事項
報告書作成時に、論文発表等実数を確認するのは煩雑なため、実数を把握する簡単なシステム構築が必要である。
6. 平成29年度への継続の有無
無

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成28年度活動報告書 (4/4)

学部・委員会名	農学部（畜産学科）
学部長・委員長等氏名	学部長 小川 博
担当所管	畜産学科 桑山岳人
テーマ	在学生対応の強化

※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
1,2年生は3,4年生に比べると学科教員との接点の脆弱性が否めない。そこで、教員と学生の接点の強化や開講科目の質の向上による在学生の満足度の確保を図る。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 少人数クラス担任制導入の検討 ・ 教員の授業参観の実施 ・ 優秀卒業論文発表会の開催、研究室ごとの研究成果の公開 ・ 学生有志団体『畜友会』の活動指導体制の充実
3. 達成度を判断するための指標
<ol style="list-style-type: none"> 1) 所属研究室分けの志望優先度の集計 2) 卒業時に実施する学生満足度アンケートの集計 3) 畜友会年間事業計画・収支決算
4. 成果・評価
<p>■成果</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 所属研究室分けの志望優先度の集計：前年度より研究室志望の偏りがなくなった 2) 卒業時に実施する学生満足度アンケートの集計：概ね前年度並み 3) 畜友会年間事業計画・収支決算：H29.6.23の総会開催予定 <p>■評価（5～1で記載してください）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) : 4 2) : 3 3) : 3
5. 課題及び改善事項
H30年度には、旧農学部の学科と新農学部の学科の学生が混在するため、教育活動、課外活動について学部としての対応を今年度前期中に検討しておく事が重要である。
6. 平成29年度への継続の有無
無

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成28年度活動報告書 (1/3)

学部・委員会名 農学部

学部長・委員長等氏名 小川 博

担当所管 バイオセラピー学科

テーマ 学生の修学状況改善に寄与する教育の充実

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）

バイオセラピー学科の過去5年間の受験倍率、卒業時 GPA および就職率の関連性を統計学的に独自調査した結果、「入試倍率=3.0 程度以上を維持しつつ、教育で GPA を適値（2.4 付近；卒業時）に上昇させる教育ができれば、93% 程度以上の就職率が得られる傾向がある（ $p=0.0513, r_s=0.9$ ）」ことが判明した^{資料1}。これは、出口対策には入り口対策および教育の質を確保すること（すなわち3ポリシーの遵守）が重要であることを意味している。これに反して、H27 年前学期授業評価および学修時間アンケート分析結果（2015. 12. 18；農大 FD フォーラム）より、バイオセラピー学科学生の学修状況は「50%以上の学生が1科目あたりの週学修時間が45分未満」^{資料2-1}であり、前述の GPA 適値につながる学修時間であるとは判断できない状況にある。また入試倍率については、学長による改組説明会（2016. 1. 25 農学部にて開催）で触れられたように、推薦入試の入学者割合が高くない状況であり、さらに一般入試については倍率が高低の順でほぼ経年変化を辿っている。特に推薦入試による合格者数については検討を行う必要があるが、H30 年度学部改組が進められている中で、H28 年度の学科としての最重要課題は教員の本分である「教育の充実」であると判断した。FD フォーラムにて示されている学修時間確保に寄与する授業運営の工夫^{資料2-2}を取り入れ、教育目標や到達点を意識した学生の充実した学修成果に結び付けることで、バイオセラピー学科の課題であった就職率の将来的な安定化に結び付けることが目標である。

2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）

<学修の質および学修時間の改善>講義の目的と授業の到達目標を学生に理解させ、学習意欲を高めた上で学修時間の確保を図る

- ①講義の目的と授業の到達目標について適宜（第1回～履修変更期間）明示する
⇒レジュメ、スライドなど、授業担当者が適宜使用する（共通フォーマットを作成する）
 - ②授業の内容を理解するための参考書籍、評価基準、学習の指示を与える
⇒レポート用紙等について学科の共通したフォーマットを導入することで、学生同士の討論材料として役立つ（学生同士の共通理解に役立つ）
 - ③講義スケジュールを（WEB シラバス以外でも）明示し、変更の際には周知する
- （①～③は全て、学修時間に正の相関を持つ項目である）

3. 達成度を判断するための指標

- ・H28 授業評価アンケート解析結果（FD 向上委員会；学科長である増田が分析担当である）
- ・授業改善のために実行した対策のまとめ（各項目について導入の有無を学科内調査し、学修時間との関連性を探る）と（H28 年度報告書提出時期に間に合えば）就職率との関連性検討結果

4. 成果・評価

■成果

- ・授業改善案を提示した結果、多くの教員がそれらを実施したことが判明した
- ・学生の授業評価アンケート結果の分析により、多くの項目において学生の修学状況が改善していることを確認できた
- ・卒業年次生の成績状況と卒業後進路の関係について、関連性が確認できた

■評価（5～1で記載してください）

- 4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた

5. 課題及び改善事項

特になし

6. 平成 29 年度への継続の有無

無

理由：無理なく実施できた活動計画であり、また、本活動内容は、テーマ③「ディプロマ・ポリシーを実現するための取り組み」との類似性が高かったため、今後は活動計画の継続課題とは捉えず、通常業務の範囲内として継続する。

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

添付資料 1

1-1 授業評価アンケート解析結果

1-2 授業改善のために実施した対策

1-3 卒業年次生の進路と卒業時 GPA の関連性検討結果

平成28年度活動報告書(2/3)

学部・委員会名 農学部学部長・委員長等氏名 小川 博担当所管 バイオセラピー学科テーマ 専門知識と技術習得に向けた教育体系の向上および学生の実践的教育・研究環境の整備
(H27からの継続課題；H27テーマ①および②の一部)**1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）**

H27年度に一部実験実習科目の体系化と、それらで使用される機器備品整備を行うことで、学生のバイオセラピー学の理解向上に取り組んだ。今年度のテーマ①では主に学生の学修の質に関する内容を取り上げているが、本テーマ②では、充実した学生指導体制と環境を確保すべく、バイオセラピー学のさらなる体系化、学生のサポート体制および教育研究環境の整備に焦点を当てている。今年度残された課題は、学科内実験実習検討委員会による、前年度検討を行わなかった実験実習科目の体系化、オフィスアワー等の活用状況評価と再検討（FD）、機器備品整備委員会による機器備品更新の効率化である。

2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）**1. 実験実習科目の体系化と指導体制強化**

前年度は農学・生物学系およびバイオセラピー学の基礎的実験実習の内容見直しを行ったが、生物学系の実験実習については基礎生物学に基づき、担当者の担当回数平均化や担当者同士のサポート体制充実など、更なる見直しを行う必要がある。また、前年度に検討を加えていなかった科目（化学実験）についても検討を行う。

2. オフィスアワーの活用状況調査

前年度、試行的に学科教員のオフィスアワー一覧の開示を行った。一部の学生はこの試行に反応して質問や相談に訪れたが、オフィスアワーの存在や意味の理解が学生間でどれほど浸透しており、どの程度の効果を発揮しているかを把握する必要がある。特に学科教員との関係が希薄になりがちな1,2年生を中心に、その効果やサポート体制への要望についてアンケート調査を行い、その後の検討の材料とする。

3. 機器備品環境の改善と整備

学科所有機器備品の効率的な共通利用化を推し進める。また前年度に引き続き、機器備品整備委員会が中心となって、計画的な研究環境改善および機器備品更新案の作成等を行う。

3. 達成度を判断するための指標

- ・ 実験実習検討委員会の活動状況
- ・ オフィスアワーの活用状況調査結果
- ・ 機器備品整備委員会の活動状況

4. 成果・評価**■ 成果**

- ・ 実験実習科目3科目（生物学、分野別基礎、化学）で内容および運営の変更を行った
- ・ オフィスアワーの認知度および利用実態を調査し、周知の必要性などの改善点を見出した
- ・ 実験実習の必要消耗品について、購入および利用効率の検討を行った

■評価（5～1で記載してください）

4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた

5. 課題及び改善事項

機器共同利用のシステム構築と新規共通機器配備による教育研究環境の充実を前年度の課題として挙げていたが、H30 農学部学部改組の準備が進行するにつれ、学科単位ではなく学部単位で計画的に進めるべき内容であると判断されたため、既に組織されている学部の改組委員会にて検討を進めていただく必要がある。

6. 平成 29 年度への継続の有無

無

通常業務として定着したこと、学科の募集停止により予算額を含めた種々変更が考えられ、計画に沿った活動ではなく、臨機応変な対応が求められることが予測されること、H30 農学部学部改組により学科単位でなく学部単位で検討すべき課題であることから継続はしない内容であると判断した。

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

添付資料 2

2-1 実験実習検討委員会の活動状況

2-2 オフィスアワーの活用状況調査結果

2-3 機器備品整備委員会の活動状況

平成28年度活動報告書 (3/3)

学部・委員会名 農学部学部長・委員長等氏名 小川 博担当所管 バイオセラピー学科テーマ ディプロマ・ポリシーを実現するための取り組み**1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）**

バイオセラピー学科のディプロマ・ポリシーは、生き物、環境、人に関する知識基盤を修得し、それらの関係性について考究することで、より良い社会を創造できる能力を身に付けさせることにある。ディプロマ・ポリシーを実現すべく、カリキュラム・ポリシーおよびそれらを意識してカリキュラムを設定しているが、本年度の活動計画は、教育を内容面、環境面から改善し、学生の修学態度向上へ結びつけること（テーマ1と2）を大きな目的としている。本テーマでは、テーマ1および2の取り組みを通して、学生自身が実感し、身に付けたと判断される内容を抽出し、さらなる教育改善に結びつける手法を構築する取り組みを行う。

2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）

1. 授業評価および学修時間アンケートの結果を詳細に分析

授業評価アンケートには「授業および学修を通して実感したこと」を選択する設問がある。

この結果を詳細に分析し、また前年度（H27）との比較を行うことで、本学科が設定したカリキュラム・ポリシーに沿う結果であるかどうかを判断し、ディプロマ・ポリシー達成のための教育内容、シラバス改善の材料とする

2. 生き物、環境、人の関係性を実験実習科目のレポート記述で評価

バイオセラピー学科の特徴は、生き物、環境、人の知識技術をそれぞれ単体で学ぶだけでなく、それらの関係性について考究するところにある。バイオセラピー学科では今年度から、実験実習演習科目の一部に、受けた実験実習の内容がどのような領域に役立つかを考え、記述させる欄を設けたレポート用紙のかがみを配布している。これらレポートの記述結果を解析することで、学生の他分野との関係性の考究度合いを評価し、ディプロマ・ポリシーの達成度合い評価の材料とする。

3. 達成度を判断するための指標

- ・学期末に行う授業評価および学修時間アンケートの解析結果
- ・学科で作成した実験実習科目の記述内容分析結果
- ・上記2点について学科で議論した内容（学科会議議事録）

4. 成果・評価**■成果**

- ・ディプロマ・ポリシーの内容（生き物・環境・人の関係性を考究）を学生に認識させるための課
題を盛り込んだレポート用紙を学生に提供し、実習の課題として用いた
- ・学生の修学状況の把握および成績不振学生への対応を中心に学科内にて情報を共有し、対応した
- ・実施計画に基づき実行できたものの、一部が分析および議論途中であるため、継続課題としたい。

■評価（5～1で記載してください）

3 方針に基づいた活動ができた

5. 課題及び改善事項

学生が課題にて考察したディプロマ・ポリシーの内容のフィードバックと、それらの考えをさらに深化させる方策を練ることが今後の課題である

6. 平成29年度への継続の有無

有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

添付資料3

3-1 授業評価アンケート解析結果（資料1-1）

3-2 学科で作成した実験実習レポート用紙への記述内容

3-3 学生の修学状況に関する、学科での議論記録

添付資料4 H28 活動総括